

平成 14 年度	<p>3) 本校独自の通知表の作成と夏季休業中の三者面談および補充学習 各学期の学習状況を「学びの足跡」として配付する。ここには、生徒自身の反省・自己評価も加える。これをもとに三者面談を行い、評価規準表に基づいて「どこが、どのように評価されたのか」「何をどうすれば、よりよくなるのか」を具体的に助言して、生徒の意欲化を図ることとともに、保護者に対する学校としての説明責任の一部を果たすことを目指す。そして、観点別評価規準を実現できていない生徒を対象に、夏季休業中の補充学習への参加を呼びかけ、各学年で指導にあたる。</p> <p>4) 基礎学力補充・向上を目指す手だての工夫 中学校の学習では、漢字の読み書き、無理数まで含む四則計算、英単語と英文の基本表現などが、いずれも基礎として重要なものであり、これらは反復練習によって理解と記憶の定着がはかれるものである。そこで、これらの定着度合いを生徒自身で認識させ、達成感や自信を持たせて学習意欲の高揚を目指す工夫をする。</p> <p>5) 評価論についての学術的研究 静岡大学教育学部助教授熊野善介(くまのよしすけ)先生に授業参観していただき、評価についての考え方と実践(生徒の学習活動に対する適切な励ましや軌道修正のための助言、学力の見届けなど)について講話をしていただいた。</p>
----------------	---

平成 15 年度	<p>1) 観点別絶対評価規準の見直し 平成 14 年度当初に各教科で作成した観点別絶対評価規準表を授業実践と生徒のようすから見直す。</p> <p>2) 各教科学習の意義についてのガイダンスの充実 年度当初や各学期の始めにあたり、「なぜ、この教科を学ぶのか」「この教科の学習を通してどのような力を身に付けて欲しいと願っているか」など、学習の意義を学年に対応したかたちで生徒に明らかにする。この“意義や願い”と観点別絶対評価規準の「関心・意欲」(向上目標)とによって、教師が確かな指導観・教材観を持つようにする。</p> <p>3) 「自己を見つめる活動」「自己をひらく活動」を設定した授業や少人数指導による授業の展開 平成 11 年度・12 年度の浜松市教育委員会研究指定によって実践研究された「自己を見つめる活動」「自己をひらく活動」を取り入れた授業によって生徒の自己評価力の高まりと自己表現力の高まりが確認された。その成果をさらに進展させるとともに、授業の中で基礎・基本の定着を図る工夫を各教科で研究する。また、第 2 学年「英会話」の授業をはじめとする複数教科で保護者や地元地域の方々の御協力をいただき、“ゲストティーチャー”システムを取り入れたり、生徒自身の選択による少人数指導授業(2C3T)を拡大・充実したりする。</p> <p>4) 校内定着度評価試験の継続実践とその「学力分析」の蓄積 平成 14 年度と同様に、年間 5 回の校内定着度評価試験を実施する。平成 14 年度の第 1 学年・第 2 学年の生徒たちの中から各教科で学力の上位・中位・下位にある生徒を抽出し、追跡調査を行う。</p> <p>5) 三者面談と補充学習の継続 生徒にとっては、学習への取組の反省ができ今後への目標・希望をもつことができる機会とし、保護者にとっては、わかりやすく丁寧に学校でのようすを伝えて“蛭塚中学校に任せておけば安心”と言われるような面談を目指す。補充学習についても、平成 14 年度の成果を生かしつつ、各学年の実態に即した方法を探す。</p> <p>6) 基礎学力向上を目指す指導の継続 平成 14 年度には 11 月から水曜日の放課後 25 分間を使ってチャレンジ検定を試行したが、平成 15 年度には生徒の学ぶ意欲や主体的な学習をさらに高められるような取組として当初から計画・実践する。</p> <p>7) 保護者・地域への公開と意見・感想収集 本校の実践を保護者や地域の方々に参観していただき、忌憚のない意見・感想を寄せていただく。それを参考に、研究主題の具現や保護者や地域の期待に応えられる学校づくりに努める。</p> <p>8) 他の学力向上フロンティアスクールへの視察 他校の実践を参考にさせていただくように、計画的に視察を行いたい。</p>
----------------	--

平成 16 年度	<p>1) 観点別絶対評価規準とガイダンスの方法や内容の見直し 平成 15 年度の各教科の観点別絶対評価規準表を見直し、平成 16 年度の授業展開の中心として据えるよう教科部会で検討する。ガイダンスについても、平成 15 年度年度に実施したのを見直し、各教科での学習の意義を各学年に対応したかたちで生徒に向けて明らかにする。</p> <p>2) 「自己を見つめる活動」「自己をひらく活動」を設定した授業の継続・発展 平成 14 年度からの授業研究を発展させ、授業の中で基礎・基本の定着を図る工夫を各教科で研究する。特に、追究活動やディベート活動によって<自分の意見を説明する場・他者の意見を謙虚に聞く場>を設け、</p>
----------------	--

平成
16
年
度

公平で科学的な学習態度の育成に努める。また、自発的な学習を促す授業の展開に努める。

3) 校内定着度評価試験の継続実践とその「学力分析」の蓄積

年間5回の校内定着度評価試験とその自己評価(「学力分析」)を実施する。平成15年度から抽出して追跡調査してきた生徒たちの学習成績の変動について引き続き調査し、仮説の検証にあたる。

4) 三者面談と補充学習の継続実践

生徒たちに自分の学習への取組を振り返らせ、自覚と今後への目標を持たせられるような面談を行う。保護者に対しては、学校での生徒のようすを丁寧に伝えるとともに、生徒たちの健全な成長を目指す本校の教育方針や実践活動への理解・浸透を求める面談を目指す。補充学習についても、平成14・15年度の評価をもとに各学年の実態に即した方法を探して実施したい。

5) 基礎学力向上を目指す指導の継続と効果の検証

平成15年度の実践をもとに、追跡調査対象の生徒たちを中心として授業の中で見られた変容や「チャレンジ検定」で獲得した級などを記録、見届けていく。

6) 保護者・地域への公開と意見・感想収集

昨年度と同様に、本校の授業のようすを保護者や地域の方々に参観していただき、忌憚のない意見・感想を寄せていただく。それを参考に、保護者や地域の期待に応えられる学校づくりに努める。

7) 他の学力向上フロンティアスクールへの視察

他校の実践を参考にさせていただくように、計画的に視察を行いたい。

8) 指定研究による3年間の実践の紹介

何らかの形で「学力向上フロンティアスクール」としての実践を紹介し、周辺地域の学校に有益な情報を提供できるようにしたい。

(3) 研究の成果と課題

1) ガイダンスの充実と学習意欲の向上

「この教科を学ぶ意義」を説明し、「教師の願い」を熱く語ることで、指導者の気迫が生徒に伝わり、教科学習に取り組む真剣さが増してきた。

2) 夏季休業中の補充学習と学習の成就感・自信

1学期を終えて、各教科の観点別評価規準を実現できていない生徒には、夏季休業中の補充学習への参加を呼びかけ、各学年で生徒の実態に即した指導にあたった。この学習会が刺激となって、ある男子生徒は夏休みの家庭学習を充実させ、2学期の校内試験では一気に60番学年内の順位を上げた。

3) 『チャレンジ検定』と自己評価

昨年度後半から「漢字の読み書き、基本的な四則計算、英単語」の理解と記憶の定着を図るための手立てとして『チャレンジ検定』を実施している。授業で学習した内容と関連させて真剣に取り組んでいる様子が「合格級」の度数分布に見られる。……(グラフ参照)

図1 国語

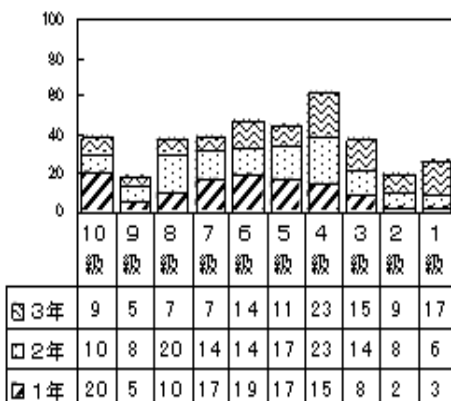


図2 数学

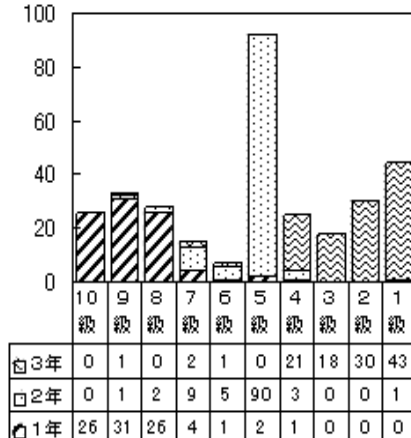
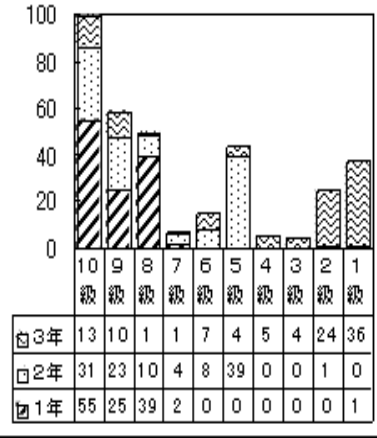


図3 英語



4) 浜松市学習内容定着度調査の分析

浜松市教育委員会が実施する国語・数学・英語の定着度調査結果を用いて、本校生徒の正答率を項目ごとに分析したところ、国語では漢字の読み・文章構成力・読解力などで満足できる結果とは言えないことが示された。また、第1学年の数学では、文字式による抽象的な計算概念の定着率が低いこと、英語では英文読解と英作文の力が弱いことが明確に示された。これらは、今後の指導のためのデータとして活用したい。

5) 学力論・評価論についての学術的研究

有蘭 格先生(静岡文化芸術大学教授)から、学力観と生徒の学習活動を見届ける方策を教えていただいた。

課題

平成16年度の取り組みとして、以下のことを数値目標として掲げる。

- ・英語検定：50名以上の生徒が3級に合格する。(平成15年度3級合格者数=45名)
- ・漢字検定：中学1年終了時=20%以上の生徒が5級に合格する。
中学2年終了時=40%以上の生徒が5級に合格する。
中学3年終了時=40%以上の生徒が4級に合格する。
- ・浜松市学習内容定着度調査：各教科の全問題の正答率を市全体の正答率に対して15ポイント高める。
国語科の重点：読解力や適切な日本語の文章を構成する力を高めるような指導を工夫する。
論理的な思考力は広沢小学校でかなり育成されているので、その延長として読解力の育成に努める。
数学科の重点：負の数を含む四則の混ざった計算、分数の計算などの基礎練習の機会を増やす。
英語科の重点：ALTの発音聞き取りと比較的長い英文の読解、英作文表現が的確にできるように反復練習を行う。

(4) 研究成果の普及の方策

平成14年11月19日「平成14年度小中学校教育課程編成説明会」にて本年度の取組を報告。
中日新聞(平成14年12月12日付)に「学力低下の不安払拭：独自の検定試行」として掲載。
静岡新聞(平成15年1月8日付)に「生きる力養う自己評価」として掲載。
平成15年11月4日に「学力向上フロンティア事業 中間報告会」を開催、授業を公開。
本校HPにて「各教科観点別絶対評価規準」「学力分析表」「チャレンジ検定」などを公開。

<http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/shijimizuka-j/>
shijimizuka-j@city.hamamatsu-szo.ed.jp

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下	4～6学級		
	7～9学級	10～12学級		
	13～15学級	16学級以上		
【指導体制】	少人数指導 その他	T・Tによる指導		
【研究教科】	国語	社会	数学	理科
	外国語	音楽	美術	技術・家庭
	保健体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】	有	無		

【特色ある取組事例として紹介したいポイント】

英語の授業における地域人材の活用(地域には海外生活の経験者が多数居住し、英会話の補助として1授業に対し、4～5人の人材が入っている)
学校独自の『チャレンジ検定』を実施し、生徒の意欲を喚起している。
校内定着度評価試験の実践とその「生徒自らがつくる学力分析」を実施している。教師主導ではなく、一人一人の生徒が自分の学びを変える取組をしている。